第６章　第２次調査10号土坑出土の犂先

犂先について

1989年度調査の９号土坑では、土坑底面に土師器皿を並べた上に鉄製の犂先が出土している。犂は、古墳時代以降に中国から伝わってきたといわれているもので、弥生時代から使われている人力による掘削具の鋤（すき）に対して牛馬に引かして耕す道具である。弥生時代から使われている鋤はまっすぐな櫂状のもので、人力で土中に押し込み耕す道具で現在のスコップのような使われ方をしたのに対し、犂はより深い耕作が可能であり、犂の使用はより安定し効率のよい耕地の開発を可能にした。

出土した犂は、２点ありいずれも犂先といわれる犂の先端部分につき土中に刺さる金属の部分である。犂先の大きさは17.2㎝×46.2㎝高さ4.8㎝である。この大きさは他の遺跡出土の鉄製犂先に比べ非常に大型のものである（第36・37表）。犂は江戸時代までは床の長い長床犂が一般的であるが床の長さによって短床犂、長床犂、無床犂などと分けられることができる、当遺跡出土のものは八尾市の歴史民族博物館に収蔵される民俗資料などと形態が近似することから長床犂の犂先に属すると考えることができる。

今回出土した犂は犂先だけであるが、滋賀県草津市中畑遺跡では平安時代末のものが犂先を除いてほぼ完存しており、具体的な構造を知ることができる。また現在でも中国では昔から変わらない形で犂を牛馬に引かして耕作をしており、『六道絵』（大津市聖衆来迎寺蔵、鎌倉時代）や『松崎天神縁起』（山口県防府天満宮蔵、鎌倉時代）などの絵画資料からその当時の犂を使った牛馬耕の様子を知ることができる。

犂の変遷と犂先の主な出土例

古墳時代

犂は古墳時代に日本に伝わってきたとされているが。古墳時代の犂の出土例はきわめて少ない。古墳時代の犂といわれているものは現在のところ宮崎市の古墳出土のものと、島根県益田市匹見町広瀬の古墳出土、の２例が知られている。しかし匹見町のものは木下忠氏の再検討により、室町時代のころのものとされているが、宮崎市のものは古墳時代、５世紀から６世紀頃のものと見て間違えないようである。古墳時代には鍬先、鋤先や、鎌などの鉄製農耕具の出土例は多いが、犂先の出土例は極端に少なく、他の鉄製農耕具に比べ犂は一般階級の農民のなかでは一般的な農具ではなかったと考えられる。

奈良・平安時代

奈良時代のものでは遺跡からの出土例ではないが正倉院には天平宝字二年の銘が入った「子の日の手辛鋤」といわれるものがある。奈良時代には古代中国から伝えられた、毎年年の初めの十二支の一番初めの子の日に天皇みずから土地を耕す儀式があり、この「子の日の手辛鍬」は天平宝治二年一月三日に孝謙天皇によってその儀式に用いられたものだということがわかる。この犂は犂先のサイズが18.5㎝×12㎝で、匹見町の25×18㎝、宮崎市の30×21㎝に比べるとやや小型だが、その大きさからも実際に使用したのではなく儀式専用と考えることができる。延喜式においては天皇家の食事を作る内

膳司へ当てられていた農具の中には牛のほか、馬鍬（犂）辛鉏閑良（犂鐓）鋒（鍬先）があげられている、このようなことから８世紀初頭以来機内の官田においては牛による犂耕が行われていたようである。

金属製ではないが香川県坂出市の下川津遺跡では木製の犂先、犂へら、犂床を一木で作っている犂が発見されている。７世紀初頭から後半と考えられる流路内から出土している。

大阪府茨木市宿久庄西遺跡では金属製の犂先が平安時代のピットの中から発見されている。

中世

中世になると「今昔物語集」「宇治拾遺物語」などの文献からは唐鋤が「家の具」として鍋釜とともに農民の家に備わっていたものだということがわかる。また一乗員文書からも名主百姓クラスの農民は役蓄一頭、犂一具、鍬一口の鉄製農具を所有していたことがわかっている。文献資料からは犂の所有が一般的になってきたのはわかるものの遺跡からの発見事例は少なく石川県では野々市町長池キタノハシ遺跡、羽咋市永光寺遺跡の中世の土坑から発見されている。

犂などの農具と埋納祭祀について

当遺跡出土の犂先は土坑の底面に土師皿を並べその上に犂先を置くという出土状況であるが、土師器が意図的に並べてあることから埋納祭祀的なものが考えられる。

何かを埋納し祭祀的なことをするというと地鎮祭というものが考えられる。中世の地鎮というと一般的に輪法、賢瓶などの密教法具、輪法を墨書した墨書土器、銭貨と土師皿、銭貨と羽釜といったものを埋納するのが知られている。犂先に限らず農具を埋納する地鎮はあまり知られていない。地鎮といわれているものに限らず農耕具を埋納する祭祀の例も少数ではあるが見つかっている。

石川県野々市町長池キタノハシ遺跡、同県羽咋市永光寺遺跡では鉄製犂先が土坑内から出土しており土坑内に埋納されたと考えられている。大阪府茨木市宿久西遺跡では平安時代の掘立柱建物跡の柱穴内から鉄製の犂先が出土しており埋納されていたと報告されている。

また平安京では土坑内に礫や土師器を並べて配置しその上に鉄製の鍬を配置した土坑が発見された例が報告されている。

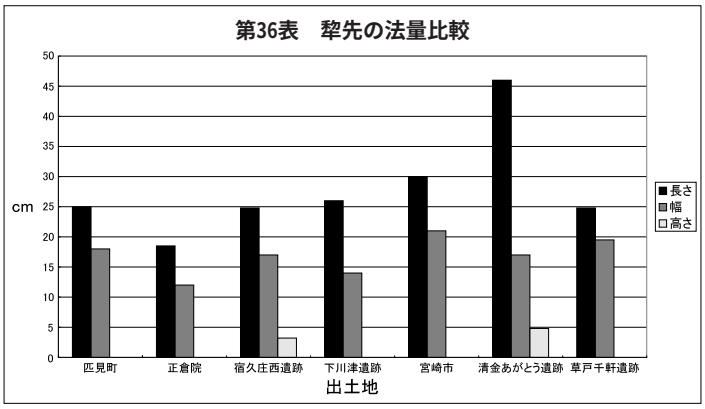
鉄製犂先以外の農耕具を土坑以外の穴に埋納した例を考えると木製の犂本体または鍬を井戸に埋納した例が複数例見られる。石川県金沢市梅田Ｂ遺跡では中世の井戸の掘り方内から木製の鍬が発見されている、この鍬はほぼ完形であり井戸の掘り方内部からの発見であることから井戸構築時に意図的に埋納されていたと考えることができる。また滋賀県の大津市関津遺跡、草津市中畑遺跡では井戸の掘り方から金属製の犂先以外の木製の犂本体が埋納された状態で発見されている。特に中畑遺跡のものは、埋納時期10世紀末～11世紀初頭と考えられており、井戸枠外の掘り方底面付近に木部完形の犂を埋納してある、埋納に当たっては犂轅の先端を折っている。また同遺跡の別の井戸では掘り方内に鉄製Ｕ字型刃先を装着した一本鍬を、刃先を折って埋納しておりこちらの埋納時期は10世紀前半と考えられる。

以上が犂または鍬の埋納祭祀を行っていたと考えられる主な遺跡の状況である。意図的に犂などの農耕具を埋納している遺構があるということがわかる。いずれの調査例においても祭祀の具体像を断言するのは難しいが土坑に埋納されたものは、土地、家屋に対する地鎮、と考えられるであろう、井戸で行うものは当然「水」に対する祭祀で、日常生活、生死に直接関わってくる水に対しては頻繁に

祭祀が行われていたと考えられる。ではなぜ農具を使ったのかということに関しては明らかではないが一般的に地鎮は土地、家屋の安堵を祈るためのであるが農具を使う場合は農地の安堵を祈る祭祀か豊作を祈る祭祀が行われていたと考えることができる。清金アガトウ遺跡においても意図的に土師皿を敷き詰めていることからも埋納祭祀ということが強く言え、その上の犂先を重ねることから農地に関する祭祀をしていたことが推定される。

まとめ

日本の農具史においては鍬の時代と犂の時代が交互にあるといわれているが、古代から中世は犂の時代といわれるその時期において文献資料からは犂が一般的であったことがわかるが、考古遺物としての出土例は数少ない。清金アガトウ遺跡出土の犂先は一般的であった中世農民の犂の使用が手取川扇状地でもあったことが証明される数少ない資料のひとつとなる。また中世の埋納祭祀に関しては直接宗教と結びつけたることができるものや、近現代の民俗例に見られるもの以外にもたくさんあったと考えられるが農耕具の埋納祭祀の貴重な例として今後どのような祭祀行為があったかを考える重要な資料となるであろう。



第37表　犂、鍬の出土例

出　土　地	遺　跡　名	時　　期	出　　土　　状　　態
宮崎市		５から６世紀	犂先
益田市匹見町広瀬		５から６世紀または室町時代	犂先２点
石川県野々市町	清金アガトウ遺跡	13世紀	土師皿と共に土坑出土　犂先
奈良	正倉院	天平宝字年間	正倉院の宝物　犂先と木質部分全体
滋賀県大津市	関津遺跡	13世紀	沼　犂床犂柱部分が出土
大阪府茨木市	宿久庄西遺跡	12世紀	掘立柱建物の柱穴上層から出土12世紀前半の瓦器椀と共範　犂
石川県野々市町	長池キタノハシ遺跡	13世紀～16世紀	中世の土坑出土　鋤先
石川県羽咋市	永光寺遺跡	中世	中世の土坑出土　鋤先？
香川県坂出市	下川津遺跡	７世紀初頭～後葉	流路内から金属部分以外
滋賀県草津市	中畑遺跡	10世紀末～11世紀初頭	井戸の掘り方から犂先の鉄の部分以外井戸の掘り方を埋めるときに意図的に埋めたと考えられる。
広島県福山市	草戸千軒遺跡	中世	

参考引用文献

滋賀県文化財保存協会　2005　『大津市関津遺跡現地説明会資料』

野々市町教育委員会　2000　『長池キタノハシ遺跡野々市町御経塚第二土地区画整理に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』

石川県埋蔵文化財センター　1997　『永光寺遺跡』

香川県教育委員会　1990　『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化発掘調査報告Ⅶ　下川津遺跡』

滋賀県文化財保護協会　2005　『中畑遺跡Ⅱ』

永原慶二　他　1983　『講座・日本技術の社会史　第一巻　農業・農産加工　日本評論者』

飯沼次郎　他　1976　『ものと人間の文化史　19・農具　財団法人法政大学出版局』

河野通明　1994　『日本農耕具史の基礎的研究』 和泉書院

北陸中世考古学研究会　2001『中世北陸の井戸』

（財）大阪府文化財センター　2002『宿久庄西遺跡』

木下　忠　1977『島根県匹見町広瀬出土の犂鑱の再検討』 松崎寿和先生退官記念事業会

久世　康弘　1999『京都市域における埋納（遺構）の集成』 京都市埋蔵文化財研究所研究紀要第５号